涼宮ハルヒと現代文学

―― 環境文化史的情報爆発後の世界 ――

Haruhi Suzumiya's Postmodern Literature

―― After Information Explosion ――

岩　見　幸　恵

キーワード：涼宮ハルヒ、A・トフラー、村上春樹、現代文学、環境

要　約

谷川流の小説『涼宮ハルヒの憂鬱』（以下『涼宮』）[1] で描く情報爆発後の世界を、A・トフラー『第三の波』（1980）や環境文化史的視点での、現代文学的読解の方法であるリンクによりシュミレーションする。現代文学の研究はリンクを用いたキャラクターデザインの解析と各々の項目が持つ予言的要素を汲み取ることがその本体となる。情報革命に至るパラダイムシフトの歴史をたどると、農業革命では中央集権国家が生まれ税金を徴収し、公共事業や侵略戦争、私有という制度が生まれ、中央集権国家の崩壊後、地方分権国家と貨幣経済が発生する。それに次ぐ産業革命後の社会は、分業による大量生産、機械の発明による部品の互換性精度、文学や音楽と著作権の成立する時代である。現在進行形である情報革命後の世界ではこれら獲得した制度のいずれかの選択に迫られている。集権制か分権制か、どちらにせよ情報の隠蔽と暴露が不信を招き、ネットからの孤立主義（スタンドアローン・コンプレックス）を生む。

1．はじめに

環境文化史とは、我々を取り巻く広義の環境、経済、社会、人生他全ての歴史であり、これらを囲碁のように並行する物語のプロットとしてシュミレーションすることにより、より環境破壊リスクの軽減した未来を導き出すことを目的としている。素材とする『涼宮』シリーズは若い読者を対象とした現在進行中のライトノベルの傑作で、情報爆発後の世界を描く。情報爆発は『第三の波』のいう情報革命を想起させる。日本人はトフラーのような理論構築は得意としないが、物語を作ることは得意分野であり、『涼宮』はそれらの具体化、情報革命後の世界を描く作品である。そこで本論は近代文学と現代文学の違いを検討し、現代文学の特徴であるリンクによるキャラクターデザインや予言性を創り上げる構造、システムについて述べ、『涼宮』や『第三の波』に適用する。事件を一つ一つに並べて説明していくのは歴史も物語も同様で、そのためのリアリティー演出には因果律が用いられる。因果律から革命の因子の捜索が可

能となり、それは情報革命あるいは涼宮ショックをうまく乗り切る要件となる。つまり本論はソフトランディングあるいはリスクの回避のためのマニュアルとすべき一つの解析でもある。

2．現代文学の特徴

⒜　近代文学（モダン文学）と現代文学（ポストモダン文学）の違い

現代文学は第一次世界大戦前後に欧州に始まる新しい文学形式である。それ以前の近代文学つまり産業革命後の文学が単一のイデオロギーや宗教を背景とするのに対し、それらが終焉し、複数のイデオロギーや宗教が対立する世界に現れた文学である。日本は古来、多神教で複数のイデオロギーが混在し、それらをむしろ得意分野とする。日本における現代文学はシベリア出兵から関東大震災がその対応時期となるが、名称は現代文学ではなく、探偵小説等の名称が与えられ、耽美派、芸術至上主義者の文学として明治の後半には登場しており、その意味でジャンル分けは無意味となる。谷川流のこの作品は村上春樹の『神の子どもたちはみな踊る』[2] と密接に関係する物語である。村上の作品は1995年１月17日の阪神大震災から３月20日の地下鉄サリン事件までの一ヶ月間をオムニバスストーリーとして描いた。村上初の連作三人称小説で、村上にとって、自身だけでなく現代文学においても大きな転換点、一種の情報爆発を意味する。

現代文学の特徴の一つに失せ物を探すというイベントがある。失せ物は物でも人でも可能で主人公たちは探すという行為をする。失せ物は御神籤の項目等にもあり、出てくる、あるいは出てこないという神話的要素を有する。『涼宮』でも SOS 団に舞込んだ最初の事件依頼としてコンピュータ研究会（以下コンピ研）の部長を探す。『涼宮ハルヒの消失』（以下『消失』）ではハルヒ自身が行方不明となる。ハルヒたちの通う高校は北東方向に甲山が有り、甲山学園事件[3]や芦屋を初期点とするグリコ森永事件[4]もリンクしている。

現代文学は時系列では描かれないが探偵小説のように時間や舞台は現実に存在する。読者は刑事や探偵のように現場検証、つまり文学散歩が行なえる。しかし時間軸は遠近法のディフォルメのように凹凸面状の時間が歪み、時間の圧縮や延長は探偵小説のアリバイ工作的で人々は平静を装うが、その実、宙吊り状況である。犯人はアリバイ工作という時間トリックを駆使して逃亡するが、探偵は真実によって犯人を追い詰める。しかし探偵小説は裁判に至らず、犯人の発見で終わる。裁判を行なわない理由は証言者の数だけ、あるいはイデオロギーの数だけ真実が出現し、アリバイも探偵の推理も無意味になる。証言者はこの場合、私小説と同義である。時間のつじつま合わせの齟齬は詳細で厳密な読みによって発覚する。服のタックやドレープのように時間が折れ曲がりずれが生じている。SF 小説はタイムマシーンによって時間旅行を行い、一種の歴史の改竄を行なう。歴史の改竄に読者が気付くためには厳密な読みが必要である。

一方の近代文学は時系列、つまり事件を時間の順番で絵画の遠近法的に描く。ストーリー上で主人公は人間的に成長し、読者は成長する登場人物に感情移入し感動する。児童文学等の教育的啓蒙的な散文学は、産業革命の弊害の中でその副産物として、義務教育や各種の大衆文化

とともに生まれた。主人公の成長は肉体的成長ではなく精神的なそれで、目に見えて成長せず、特定の善悪観に当てはめる限定的成長となる。つまり背景となる思想や宗教観、道徳観を読者は無条件に受け入れ、違和感を持たないが、作品発表時に支配的でも時代がずれ、イデオロギーの流行が移った後の時代の読者は硬直した勧善懲悪的文脈に違和感を感じることとなる。

⑹ キャラクターの借用

現代文学の解釈論は、引用やリンクを駆使するキャラクターデザインに集約できる。また現代文学の作家は現存するため、作家の個人情報、プロフィールは公開されていない場合が多い。谷川流はほとんど不明。村上春樹の場合は次第に判明してきた。作品が男性一人称（谷川の場合はキョンこと「俺」、初期の村上作品は「僕」小説）で語られる、私小説的形態（擬似私小説）であるため、読者は自然に作者の経歴を作品読解のヒントに利用する。故に作者は明確ではない事実、借用したプロフィールを引用、自身のものと重ねて読者に提供する。

一般的に最も評価の高い小説は、自然主義的私小説（純文学）、現実を素材にした自伝的小説である。その点において村上や谷川の評価は高いものではないが、小林多喜二の『蟹工船』（1929）はプロレタリア文学の最高峰とされる小説。プロレタリア文学も自然主義文学であり、少なくとも自伝的な物語でなければならないはずであるが、小林は銀行員で、蟹工船には乗っていない。つまりモデル小説（大衆文学）で純文学の範疇から離れる。故に蟹は揶揄の的となる。

基本的にキャラクターデザインの方法には次の三つがあり、引用の多様性を導き出す。

①自伝的作品を装う場合、自己を多重人格者的に扱い、規定。自己のキャラクターを分割していくことによって複数のキャラクターを創出する。

②古典の引用あるいは見立てによってキャラクターを創出する。

③作者自身ではないが良く似た人物のキャラクターを借用し、それらを自己の人格と重ね合せて錯覚させ、分割してゆくキャラクターデザインの方法。

この３番目がキャラクターの借用で、真に意図するところは、私小説のパロディを行なうために他の人物の自伝的事実を援用することである。キャラクターの借用は物語を大量に作り出す効率のよいシステムで、人の一生を、例えば正弦波とするとパラメータをずらすことで別のキャラクターを生み出せる。波のピッチや波高を変えることで一見、別の人生のように見えるが、よく見ると同じ正弦波である。逆も可能で他人のものも自分のものに置換え可能であり、故にその応用である歴史においても、ストーリーの改竄は容易に成される。人生のリアリティーを演出するのは、見えている部分の複雑さではなく見えない部分の奥深さである。

⑹ 空白と予言（文学の予言の問題、あるいは都市伝説的問題）

文学作品はクリスマスツリーのモミの木や七夕の笹のようなものである。近代文学の場合は

既に飾り付けは成されており、完成したツリーや笹である。しかし現代文学は未装飾で未完成のまま読者に提供され、読者はその能力に応じてクリスマスオーナメントや願い事を書いた短冊を括り付け完成させる。オーナメントはリンクによる歴史的事実や古典の引用に相当する。現代文学はキーワードあるいはリンクを追って『不思議の国のアリス』のようにトンネルや鏡を通り抜け、別世界にある外部記憶に至り、それらのデーターベース（以下 DB）にアクセスすることで別のストーリーを読み解くという文学形式である。これが予言的事項が付随する、つまり書かないことがより強力な強調表現となる、タブーの問題をも扱える、空白の表現である。

近代文学が最初から最後までストーリーを記述し結末を必ず付けるのと異なり、現代文学は断片で組織され結末にも至らず、未完成のような構造である場合もある。すなわちその完成にはリンクを読むことが不可欠であるが、多くの読者はリンクの存在に気付かない。しかし空白という違和感に刺激され、やがてリンクへ向う。例えば村上春樹の連作『神の子どもたちはみな踊る』は都市伝説的内容で、地震と地下鉄サリン事件の間が物語時間であるが、登場人物たちがリンクし、巻き込まれるであろう地下鉄サリン事件を直接描いていない。つまり表現していない。しかし2001年９・11が起こり、一連の宗教団体が起した同時多発テロに世界が震撼する。これ以降、作品評価も変化し、その先見性とともに予言性が注目されることとなった。

また『涼宮』の第一回不思議探索パトロールというイベントがある。『涼宮』は作品を将来に残すべく、漫画『サザエさん』のように年中行事が次々に展開する、学園生活を舞台とする物語。「笹の葉ラプソディ」で描く七夕は、これらのイベントの重要性を主張するハルヒにとって、彼女とキョンとの出会いである個人的体験に基づく大切な記念日。過去と未来に影響する宇宙的尺度の長大な叙事詩の出発点で、作品の初期設定に関わる情報爆発という宇宙との交信に至る全ての根源でもある。そして舞台である阪急電鉄の西宮北口駅周辺は小説の外側にある現実、新たな聖地としての外部記憶となり、物語と同じ空間を共有したいと願う読者に作品巡礼的文学散歩を促す。登場人物たちが集うモスバーガーを出て橋を渡ると「盲女子ホーム」の看板がある。ひっそりとここにある、見過ごされがちな、このモニュメントはそれだけでは何を意味するのか不明であるが、実はこの物語の空白の表現、最大の謎であるキョンという語り手の本名を解明する為の一つの糸口であり、村上春樹の「めくらやなぎと眠る女」[5] にも繋がる重要アイテムである。しかし物語中のパトロールでは何の発見もなく、各団員に委ねた足跡を、次の日ハルヒ自身がもう一度確認に出かける。つまりこの作品は読者の実地調査で発見されるべき情報によって、空白の表現の補完を待っている。したがって作品の価値は読者の積極的な読解に委ねられている。このようなリンクは平安朝和歌の技法である縁語、中世の連歌における座に似た接続方法で読者を思いがけない外部記憶に導く。もう一つのレトリックの掛詞は駄洒落に似ているが、現代文学における神話性の重要な本質である。神話性とは神話を引用することではなく、呪術的事象を作品に盛り込むことである。この呪術的事象は現代文学が発

生したのと同時期にＪ・フレイザーの『金枝篇』等によって提示された。呪術の中心は駄洒落で、ジンクスを呼び込む実用的技術（テクノロジー）である。

読者によって補完される現代文学とは、初期設定やキャラクターデザイン等において作品と現実世界を照合し、関連すると思われる歴史的事実や事件を踏まえて今を読み、読者に未来を推測させるという、作者によって予言性をプログラムされた一種の情報集積媒体である。

３．『涼宮ハルヒの憂鬱』

⑵　初期設定

『涼宮』の物語時間現在は主人公達が高校１年生の４月で、そこから３年前の７月７日の七夕の日、ハルヒは中学１年、タイムスリップしたキョンことジョン・スミスに命じて校庭に石灰で巨大な絵[6]を描く。これが全ての始まりとなる。絵の意味は「私はここにいる」である。これは巨大な情報爆発として観測され、宇宙人がやって来る。未来人は時間旅行をしていたが、この事件以降これよりも過去に遡れないことに気付く。また超能力者はこの事件後、超能力を得たことを知る。彼らは原因がハルヒであると探知。そして唯一ハルヒに助言できるキョンに近づき、ハルヒをコントロールしようとする。

物語の舞台は現実に存在する阪急西宮北口駅北口周辺。駅舎は阪神淡路大震災後崩壊し、立替られたが、それまで日本で唯一線路が十字に平面交差（ダイヤモンドクロス）していた特異な場所。北西方向の山の中腹に主な舞台となる北高がある。この地域は今日ではほぼ復興をとげているが阪神淡路大震災での被害は甚大であった。2011年、３・11直後に映画公開された有川浩の『阪急電車』（2008）での再開発後の映像は記憶に新しい。また村上のデビュー作『風の歌を聴け』（1979）もこの地域を描いている。1981年に大森一樹によって映画化。西宮北口は主人公僕と鼠が意気投合し、ビールを飲んだ後、車で植え込みに突っ込み、車は大破するが二人とも無傷であった奇跡の場所として登場する。村上も谷川と同様に作品中では明示していない作品舞台が、映像化により具体的な場所のイメージが補完されている。現在「阪急西宮ガーデンズ前」かつての阪急ブレーブスの本拠地「球場前」という駅である阪急西宮北口、通称ニシキタ。村上は神宮球場である日突然、神の啓示を受け小説家になったというが、『涼宮』の世界の中心であるハルヒは、小学６年生の時、家族と訪れた野球場で大勢の観戦客を見ているうち、世界において自分自身の存在の小ささを自覚。世界観が変わって、これをきっかけに全宇宙で向けてメッセージを送り、よりポジティな方向にシフトチェンジする。また西宮には甲子園球場がある。甲子は「きのえね」で、旧暦十干十二支の一番最初。

ハルヒ達の通う北高は作者の出身校という、現実の兵庫県立西宮北高校が想定されている。アニメ『消失』ではこの高校から少し下った所に別の女子高が登場する。現実はそこに村上春樹の父親が教師として勤めていた男子校の有名な私立の進学校と、更に麓に一貫教育の女子高校がある。また出身中学として別の離れた場所が想定されているが、西宮北高校の背後に公立

の小学校と中学校がある。

現代文学は非現実的なストーリーを補完すべく、現実に存在する時間と場所の中で、架空の登場人物たちが活躍する物語であるが、『涼宮』的世界は現実世界の地図の縮尺（スケール）を小さくしている。おそらくは半分のサイズであり、登場人物が２倍の大きさになったのと同義で、地面が２分の１の大きさになった事を意味する。また結果的に時間が通常よりも倍あるいは２分の１の速度で推移する。そこで西宮北口駅の北口改札口にある公園はアニメでは大きさを２倍程度拡大しそのままの風景を用いたが、現在は2012年に再開発され違った風景に変貌している。

物語の設定時間をシュミレーションしてみる。まず主人公達を昭和ミレニアム生まれと考えると作品発表時の平成15年（2003）に15才、高校１年生で暦の改元に伴い、平成の元号と同じ歳で未来も推移する。またその３年前、情報爆発の年は西暦のミレニアム2000年となり、1999年からPCの2000年問題で揺れた。

また、OSの改変を加味して、阪神淡路大震災が基準とすると中１が1995年、３年後の1998年に高１。物語の冒頭のキョンの独白「1999年に何が起こるわけでもなかったしな。21世紀になっても人類はまだ月から向こうに到達してねーし」を考慮して、仮に時間の速度を２分の１にすると３年が６年、物語現在である高１は2001年となり、コンピュータの暴走を描く『2001年宇宙の旅』（1968）に繋がる。

⑵　登場人物

具体的な先行文献や引用、接続（リンク）に関して各キャラクターデザインの検討を行なう。

⑴　涼宮ハルヒ

文武両道のオールマイティー人間であるが、新しい世界の創造主たる自身の神的能力に関しては無自覚。彼女は有意義で積極的な学園生活を実現させるために自ら組織した同好会SOS団の団長で、キョンを除く団員達がスペシャリストであるのと対をなす。体育の授業で教室での着替えに際して、まだ男子がいるのにハルヒはさっさと下着姿になる。物怖じしないハルヒ同様の性格を持つ、西尾維新の『化物語』（2006）のヒロイン「戦場ヶ原ひたぎ」は名前の音の響きが「ひ」と「し」が交代して、「下着」と聞こえる。下着は放射線や毒ガス、ウイルスに対する防護服あるいは戦闘服の縁語であり、この作品では他のヒロイン達も下着に関するアイテム、エピソードが頻出する。また『ドラゴンボール』（1984）の最初に登場するヒロインは「ブルマ」で下着であり、『新世紀エヴァンゲリオン』（1995）においても搭乗員達は頻繁に下着姿になる。

SOS団メンバーはキョンと長門、みくる、古泉。全員ハルヒに強制的に選ばれた。彼らはハルヒが携帯電話をかけることによってハルヒと１段階層、他のメンバー同士は並列的に繋がっ

ている。そしてコンピ研から奪取したPCでSOS団のサイトを開設。フラグを立て、一方的に情報を発信。携帯電話は日本では阪神淡路大震災後、急速に普及した。インターネットはその後である。

いわゆる典型的なカリスマとしてのハルヒの存在は、物語で日本古来からの指導者的である。すなわち①幸運を引いてくる。②不幸な事故に際して事実を呪術のようなもので捻じ曲げ、なかったことにする。③団員の生命は自らの命を犠牲にしてでも守る。まさにハルヒ的である。しかし、現実の指導者は責任を取らず、不運を他人や部下の責任にし、業務上過失という責任さえ追及されない。それなら指導者（重役・社長等）は最初から必要ない。しかし『涼宮』は現代文学であるので、そこまで直接的な批判に踏み込まない。

⑵　キョン

物語の語り手で入学当日、ハルヒの前の席になった。同じクラスに国木田と谷口という同性の友人もいる、ごく平凡な男子。彼との会話を契機に、既存の部が気に入らないのであるなら自ら作ればよいのだということを彼女に思い付かせたことから、ハルヒから信頼される人物。同好会発足に関する補佐的役回り。情報爆発を観測した３つの組織がハルヒを観測するためにエージェントを派遣するが、いずれも結果的にハルヒと会話を成立させ、実際的に作用している彼を通じて、ハルヒのコントロールを目指す。小学生の妹がいる以外のプロフィール、本名は明かされていない。叔母が名付け親であるという謎のニックネーム「キョン」の意味は様々に推測できるが、春の夜明け前「キョーン」と鳴く春告鳥であるホトトギス。また第一回不思議パトロールで実は示唆されていたのだが、読者は現実にそこに行かなければ発見できない、モスバーガーを出て橋を渡ると発見できる不思議な「盲女子ホーム」のトタンの看板は、この謎を解く鍵の一つでこの地域の郷土史と関係を結ぶ。ここでぶつかるリンク項目である中村京太郎（1880－1964）[7] という人物は、この場所に昭和５年頃女性の視覚障害者のための施設「盲女子ホーム」を建設し、昭和19年戦争が激しくなるまでこの地にあった。京太郎という名前はキョンの由来の一つであろう。京太郎は芦屋でもこの種の施設を作っており、これは村上の「めくらやなぎと眠る女」とリンクする。民主党の仕分け作業で一位か二位で有名になった「京」という名のスーパーコンピュータがあるが、これも関係する。長門有希はコンピ研とのゲーム勝負の後、コンピ研の準部員として時々活動しているが、コンピ研は数台のパソコンを戦利品として失ったが、長門有希というスーパーコンピュータを手に入れた。

⑶　長門有希

ハルヒとクラス違いの同級生で宇宙人。唯一の文芸部員であったがハルヒの率いるSOS団に部室をのっとられ、メンバーとなる。宇宙に存在する情報思念体が派遣したアンドロイドで、バックアップ用にハルヒのクラスの委員長、朝倉涼子がいる。初期段階で朝倉はキョンを殺そ

うとして長門にリセットされるが、『消失』において長門が誤動作をすると再び長門のバックアップとして登場する。『驚愕』では別の情報思念体の派遣したエージェントが登場する。いわゆる魔法のような能力によって、あるいはキョンとPC等によって繋がり事態の修復を図る。

長門という名前は山口県の旧国名であり、当然ビキニ環礁の水爆実験によって沈没した旧日本海軍の戦艦長門の名前を引いている。1954年３月１日の水爆実験の結果、第五福竜丸事件やゴジラ[8]の誕生がある。また長門市は金子みすゞ（1903－1930）[9] の出身地。西宮「盲女子ホーム」設立と時を同じくする、昭和五年に自殺した金子みすゞは３・11以後、劇的にメジャーになった詩人であるが、関東大震災（1923）の時、デビューし、1984年の全集出版をきっかけに復活した。故に村上春樹の『1Q84』[10] との関連も深い。現在もテレビCMに「雀のかあさん」を起用している非破壊検査株式会社の、みすゞの詩のCM起用の先駆けである「見えぬけれどもあるのだよ」というフレーズで知られる「星とたんぽぽ」の成立はみすゞのデビュー直前の、A・アインシュタインの来日（1922）を背景にしている。後の原子爆弾開発の基礎となる理論を提唱したアインシュタインは当時みすゞの住んでいた下関の対岸門司から離日しており、日本到着の直前の船中でノーベル賞受賞を知る。滞在中には熱狂的なブームが起こり、各地を講演し新聞等のメディアが彼の業績を取り上げた。これらの現象と量子力学的知識と彼女の詩的感性がリンクしてこの作品が生れた。非破壊検査は放射線を使って溶接等の継ぎ目の傷を探す技術であるが、原子力発電所の建設には不可欠。エコー（こだま）検査は超音波を用いたもので同様に運用される。３・11直後のテレビのライブ映像と共にニュースの合間に繰り返し流されるAC（日本公共広告機構）のCM「こだまでせうか」という詩は、福島の原発事故といった放射能という新たな経歴が付与され、我々の共通認識として３・11を象徴する外部記憶となった。

長門有希は眼鏡にショートカットのクールな外見に関わらず、キョン等との学校生活の中で経験を積み、人間的な魂を持ちつつある不安定な情報ツールだが、一方で古い人形のような彼女はプロットタイプで不便だが逆に情報の改竄はしにくい。彼女は特殊な技能を持たないキョンにとっての最後の砦である。ゆえにキョンとの情報伝達の方法は、実にアナログで、旧式のPCや本の中の栞を用いる。これには時間と場所を指定するが日を指定していないので、長門は毎日その時間に待っているのだろうかとキョンに独白させる。このような不完全な長門の指示は、物語時間を明示しない『涼宮』の設定と同じである。

また長門のような喋り方をするキャラクターで有名なのは、『新世紀エヴァンゲリオン』の綾波レイ。綾波は唯一魂を宿した入れ物。綾波レイのようなキャラクターあるいは碇シンジのような家族は島尾敏雄の『死の棘』[11] に登場する家族に原形がある。『死の棘』の物語時間はビキニ水爆実験直後。島尾の両親は福島県の南相馬の小高出身。小高は原発建設予定地である。敏雄は横浜で生糸の輸出業を営む会社経営の一族の長男。関東大震災で神戸に移住。最終的には六甲の篠原で大きな邸宅を構える。この家は戦災は免れたが阪神淡路大震災で崩壊する。

『死の棘』は特攻兵から復員後、奄美の女性と結婚して作家として自立するために東京の小岩に移住したが自らの浮気をきっかけに妻が狂い、精神病院に入院する直前で物語は終わる。現実の島尾家は精神病院退院後、奄美に渡り敏雄は図書館長になる。娘が一連のストレスで会話に問題を持つ。これが綾波レイと碇一家のモデル。近年『死の棘日記』(2008)が公開され私小説ではなくなった。村上春樹の図書館を扱った作品に登場する館長や司書のイメージも同じ島尾を引く。長門のキャラクターデザインはそのようなリンクの上にある。

⑷ 朝比奈みくる

未来人は時間旅行を可能にしていたがハルヒの情報爆発以来それより前の時代にタイムスリップ出来なくなる。そしてその原因がハルヒであると気付き観測者として派遣した一年上級生。書道部に所属していた彼女は小柄で愛らしい容貌であるため、SOS団のイメージキャラクター(マスコット)としてハルヒに強引にスカウトされ、様々なコスプレを強要される。また部内でメイド服でサービスする姿は江戸時代の笠森おせんという後年、忍者と結婚するお茶屋の女中を想起させる。彼女はキョンの質問に対して禁則事項という語を連発する。禁足は「KEEP OUT」で歴史の改竄への防衛を意味する。古泉の率いる組織とは別の組織を持つ鶴屋さんの友人。また、みくるのバックアップ要員として肉体的に成長して大人になったみくるが登場する。これは近代文学的精神的成長ではない点が現代文学的である。そして幾度かキョンを時間旅行させることによって事態の修復を図る。また『驚愕』では別のパラレルワールドから参加した異世界人みくるの弟が登場する。弟は自身が存在する世界を存在させようとして、キョンの旧友をハルヒ的人物として擁立しようとする。情報伝達の方法はクラシカルで下駄箱に投入されたメモである。この方法は長門のバックアップである朝倉涼子も使っている。未来人のイメージは歴史学者であるが、パラレルワールドの存在さえ認めてしまう歴史学者で、改竄された歴史の容認であり、脆弱な現実世界を認識している。

⑸ 古泉一樹

未来人でメイドである朝比奈に対して、超能力者グループが派遣したエスパー少年で、品のいい理論派の執事キャラ。ハルヒのストレス回避のため生み出された閉鎖空間においてだけ能力を発揮する。転校生(テンコウセイ)という属性により様々な要素を加味している。天候あるいは点呼、典故、転向等を意味する。3年前の情報爆発以来、超能力を獲得した人々で組織されたグループを作品中では『機関』という。角川映画『ねらわれた学園』(1981)に登場する英光塾は転校生が組織した超能力者の結社で、『化物語』ではつぶれた学習塾の名前に踏襲している。古泉はキョンに直接働きかけることによりハルヒの精神を安定させ危機を回避しようとする。キョンとの連絡は直接的なコンタクトである。タクシー等を用意して迎えに来る。例外的にキョンとハルヒだけが閉鎖空間に閉じ込められた時、古泉は限定的なホログラムになっ

てキョンに情報伝達する。超能力者のイメージは経済学者や陰陽師。閉鎖空間で巨大な光る神人と戦うが、巨大な神人のイメージは『新世紀エヴァンゲリオン』で南極で撮影された光る巨人や『もののけ姫』の、夜中は巨大なデイダラボッチになる鹿顔の神がある。閉鎖空間内の戦いによる神殺しは神の再生で、『金枝篇』等に描かれている再生としての神殺しである。古泉らが神殺しを繰り返すために結果的に涼宮ハルヒの力は常に再生し、本来の力を取り戻す。

4．情報爆発

次にトフラーが『第三の波』で示した(a)農業革命、(b)産業革命、(c)情報革命を検証する。

(a)　農業革命

(1)　植物栽培の演習と弊害の内包

近年の研究で縄文時代には稲作が既に始まっているという。それ以前には栗や団栗のような果樹栽培が行なわれていた。果樹は種子で比較的簡単に木を増やすことが可能で、植物栽培の演習に好都合で、容易に穀物栽培に移行できる。動物も捕らえ、しばらく蓄養し太らせてから食べる方法は牧畜への演習となる。アイヌ民族の熊祭りは熊の子どもをしばらく飼育し、その後に殺す。つまりこのような予備段階を経て農業革命が到来する。また団栗は採集か栽培か、その境界線上の植物である。ゆえに農業と狩猟採集の境界は微妙であいまいである。そして団栗は粉にして水で晒してアクを抜き、団子状にして食す。粉にすると保存性が増す。食料の保存は中央集権的軍事国家の侵略戦争を可能にする。

初期の畑作である焼畑は、２、３年収穫すると農地の養分が失われ、畑を放棄して移動する。また農業用水を降雨に依存する畑作は、栄養価の高い表土が流失し、砂漠化を生む。やがて肥料や農業用水の確保が可能となり定住が本格化する。牧畜は家畜の頭数が限られている間は環境破壊は小さい。数を増やすには井戸（飲用水）と飼料の確保が必要で、放牧から定住に移るきっかけになる。定住が始まると家畜は牧草や森林を食べつくし砂漠化が深刻な環境破壊となるが、家畜の糞尿を肥料とし、家畜の飼料は農産物の一部を当てることでリスクを回避する。ところが定住型農業のリスクは病気の発生と蔓延が新たなリスクとなる。

農耕は初期において多品種栽培の自給自足が基本である。単一品種栽培は換金作物であり、江戸時代の地域の特産品や産業革命後のプランテーションは貨幣経済の成熟が前提となる。多品種ならマメ科の植物を混ぜて植えることで地面に栄養を補えるが、単一品種ではそれが出来ず肥料が必要な上に輪作障害が起こる。それでも単一品種になるのは生産性の重視である。今日の有機農法においても単一品種栽培であることは変わらず、環境破壊リスクを伴う。

最後の要因は森林である。森林は畑作にとっても牧畜にとっても邪魔者で、焼畑の対象となり家畜がその種子や樹皮を食べて、原生林を枯らせ砂漠化が進行する。植林が始まるのは産業革命以降であるが、多くの場合、植林は単一種類のモノカルチャーである。これは保水率が低

く、降雨により鉄砲水等の洪水を防ぐことが出来ない。

伝承によると神戸の生田神社の神は、松林では洪水を防ぐことが出来ないので松を嫌う。生田神社を始め瀬戸内海沿岸の神社は三韓征伐の神功皇后の建立である。これは古い神社が度々洪水に流され、災害に見舞われたことを示唆する。神は山津波を止める広葉樹主体の照葉樹の混合林を求めたのだが、実際の植林は材木として利用しやすい杉や松の針葉樹の単色植林で、故に度々洪水に見舞われる。混合林の育成は最重要課題であるが、神戸は江戸時代、幕府の直轄地である天領であったため、諸藩のような森林の育成や伐採の禁止もなく、今は環境資源として登山や沢登りで人気の六甲山は明治初年頃までほとんど禿山であった。

広葉樹は枝を張る。枝を支えるために根が横の伸び、互いに絡み合いネット状になる。そこに大量の落葉が積もり腐葉土となり、ネット状の根と絡み、分厚いスポンジ状の表土となる。表土はしっかりと雨水を蓄え、表土の下の土は乾燥し、液状化しない。一方の針葉樹は根が真直ぐ垂直に地面に入り、落葉も少なく表土は薄い。雨水は根を伝い、土は直接多量の水を含んで液状化し崩れる。

染井吉野は優れた桜の栽培品種で挿し木によって１本の原木から世界中に苗木が伝播した。兵庫県宝塚市に豊臣秀吉が顕彰した木接太夫の彰徳碑がある。この地は古来より植木の町で秀吉の頃、接木の技術を完成したという。挿し木は接木よりも簡単な方法で、いずれもクローンで寿命が短く、染井吉野は50年ほどで世代交代が必要である。故に健康な森林は苗ではなく、種子で増やさなければならない。挿し木は応急措置としての促成栽培として一定の効果があるが、災害を止めることは出来ない。六甲の北斜面に若干のブナ林が存在し、滝の名所となっている。一方で治水のためのダムや砂防ダムは直ぐに土砂に埋まってしまい、コンクリートの骨材の鉄筋の寿命は30～40年ほどで建て替えが必要で、コンクリートの空白期は挿し木の寿命に似て混合林という安全弁が必要である。

⑵　DDT とモノカルチャー

かつてＲ・カールソンの『沈黙の春』（1962）は DDT を告発したが、禁止したのは先進国だけで、多くの国では今も使われている。農業革命によって都市が生まれた。世界中の首都は近代的な空港や巨大ホテルを有するという同じ特徴を持つ。ホテルの料金は世界中どの首都においても同じ料金であることは驚きである。ところが２番目以下の都市はそうではなく、まだ近代以前の中世や古代が存在する。しかし既にかつての習慣や伝承を失った古代である。日本のように千年以上も神社の氏子や寺院の檀家といった宗教集団が変化せず、祭を行い伝承を維持している国は希である。宗教の変化は伝承の喪失と伝統的コミュニティーの崩壊を招く。伝承には地域の農業、林業、漁業、治水の等の基本的インフラに関わる内容が含まれていたはずである。伝承の喪失は無制限に増える家畜、森林の喪失、砂漠化の進行と飢饉の発生を生み出した。農業は本来、人と自然との微妙なバランスの上に成り立ち、伝承は人類の試行錯誤の結

果を後世に伝える環境バランスの保障装置である。

第１次世界大戦後、火薬は肥料に、毒ガスは殺虫剤、戦車はトラクターに平和利用され、近代化に寄与した。アニメ『となりのトトロ』（1988）に描かれた四角形の水田は戦後の農地改良後の姿である。つまりこの物語は農業の近代化が行なわれトキやコウノトリ、妖怪達が消える、直前の姿を映している。狭山事件やグリコ森永事件を引用するが、近代化という大きな波で消滅するものの末路をあえて描かないという空白で表現する。『涼宮』においても文化祭の映画撮影の際、ハルヒの想定する白い鳩や言葉を喋る猫が突然出現する。『もののけ姫』（1997）で乙事主が若いイノシシが小さくなり言葉まで通じなくなったと嘆くが、これは現在行なわれている保護行為は絶滅してしまったヨーロッパバイソンの復元を手本としている事への揶揄。自然界に別の地域の動物を放つという行為は、『のだめカンタービレ』（2001）が引くアマミノクロウサギを絶滅危惧種に追いやったマングースと同義である。放射性物質は封じ込めるのが原則であるが震災瓦礫の広域処理という環境省の政策もこれと同義。放射性物質による遺伝子を変質させる行為や一度混ざってしまった遺伝子を元に戻すことが出来ないのも同じで、牧畜において狂牛病、口蹄疫、豚インフルエンザや鳥インフルエンザを繰り返し起こす要因となった。

ところで、これら農業による環境破壊に対する、１つの対応策として無耕作農業という方法がある。全く農地を耕さずマルチングや雑草によるグランドカバーという方法で土壌を保全する。グランドカバーは保水率が高く、マルチングは有機肥料の遅効性散布と同義である。優れた方法であるが産業としての近代的な農業に取って代わることは難しい。しかし有機農法やオーガニックコットン等の魅力的に聞こえるエコ的方法は単に除草剤を排除した農法で、根本的革命的方法ではない。人は科学という新たな神の出現により自然を支配出来ると信じたが、科学万能主義はマルクス経済学だけでなく、ダムや堤防、針葉樹の単色植林の背後にもある。

⑶　中央集権国家の登場と平等な富の分配

中国という中央集権国家の成立は農耕民と放牧民との軍事的バランスを崩し、その結果、匈奴や大月氏等の遊牧民が西方に移動し、大きな騒乱を招いた。農業革命によってもたらされた最も劇的事象はこのような中央集権的軍事国家の成立である。中央集権国家は税を徴収する。律令制は税収の方法であるが、日本の律令制は当初、土地を国有化したが直ぐに私有を認め、それにより飢饉を回避した。元々平等な富の分配を目的とするマルクスの予言した共産主義は、土地の私有や私有財産を認めなかった為に、コルホーズや人民公社での農業は盡く失敗する。

徴収した税は一旦は倉庫に保管し、政治家は投資して増やすことを考える。貨幣経済が発生する以前は穀物が貨幣の代わりをするが、そのままでは再投資して増やすことは出来ない。そこで考え出された方法は侵略戦争と公共事業による税の再分配である。

戦争による分配は徴兵制である。全ての男子が従軍し、穀物が支給される。兵士はそれらを

衣服やその他のものと物々交換して豊かになる。公共事業は主に土木工事で、巨大な墳墓や宮殿等の建設に従事した労働者に穀物が支給され、それらによって労働者が豊かになる。いずれも有効な税の運用方法であるが、従軍も労働も国民に平等感を演出することが肝腎である。その為には戦争で有名人の死は不可欠である。例えば日露戦争の乃木将軍の子息の戦死はそれである。ベトナム戦争では国会議員の子息の戦死がなかった為に、その逆となる。有名人の死がない戦争は不正な戦争である。また戦争には敗戦というリスクがある。勝利すれば兵士は略奪品等により更に豊かになるが、戦死すると全てを失う。賠償金や新しい領土という富を得ることが出来なければ、再び戦争を行う結果となり、さらに経済は疲弊する。

また戦争のない時代に政府は公共事業によって税の再分配を行なう。ピラミッドやバベルの塔の建設、高度経済成長政策も、完成した建築物に意味があるのではなく、作り続けることによる富の分配である。本来必要のないものを作る事で見かけの景気を良くしたのであって、それが完成しても人々を豊かにするわけではない。首都高速はずっと渋滞した儘でも、オリンピックスタジアムも原子力発電所も、資源の無駄遣いによって経済が疲弊しなければ、有効な富の分配方法である。しかし公共事業で特定の人々だけが豊かになるという不平等感は、政府を不安定にさせる。例えば福島の原発事故は発電所を誘致した特定地域の人々とごく一部の人だけが補助金をもらっていた事実を暴露した。事故の被害者の大部分は補助金をもらっていなかったという不平等感は、原子力発電の安全性以上に人々に反原発的態度を取らせることとなる。

戦争と公共事業は本来的に農業社会の制度であり、産業社会や情報社会では別の制度が必要であり、最も重要な事は富の分配によって国民が潤うことである。政権が不安定になると中央集権国家は崩壊し分裂する。地方分権の登場である。中央集権国家崩壊後、日本では武士が支配し、外交と軍事以外は地方政府に任せる地方分権的国家となる。地方分権は貨幣経済を招来する。地方分権は徳川時代が最も進化した。幕府は江戸に諸藩の武士を集め、その給与を使わせることによって巨大な消費都市を作った。50万を越える武士とその家族を食べさせ着させ住まわせるために、大量の消費物資が江戸に集まり、富の再分配が行なわれた。幕府は農業以外の事業は無税としたため、人々は内職に精を出し、換金性の高い生産物の生産によって大きな利益を得た。そして貨幣経済あるいは資本主義が熟成した。最も成功した生産地は天領で農業を止め、例えば神戸では酒造業が巨大化した。やがて諸藩も地域性を生かした換金性の高い特産品を生産して潤う。もちろんやりすぎは飢饉を生む。換金できる生産物は食料とは限らない。天明頃に飢饉が頻発するが、この頃がこの種の経済システムの頂点であろう。つまり地方分権による貨幣経済は農業社会のシステムから産業社会のシステムへのシフトチェンジを意味する。故に地域毎の物価の違いを反映した消費税は地方税として、所得税は直接税国税とすることは優れた富の分配の方法となる。

⑵ 産業革命

⑴ 分業

一般的に大規模な環境破壊は18世紀に英国で始まる産業革命で起こったとされている。産業革命の特徴は大量生産である。ベンヤミン等の定義によると複製技術と分業による大量生産という。つまり蒸気機関の登場による機械化によってのみ産業革命が起こっていたのではなく、それ以前に産業革命は進行していた。複製技術とは部品の規格化のことで、分業は部品の規格化により可能となる。分業は一人の熟練した職人が一つの製品を最初から最後まで生産する手法に比べると、熟練労働者ではなく未熟練の労働者が安価に大量に生産する方法で、分業の優れた点である。農業においても自給自足の多品種栽培から大量生産出来る単一品種栽培のプランテーションに移行する。

分業は日本の特殊事情である。例えば百万塔陀羅尼は現存確認されたものだけでも10万基程度現存する。同じものがこれだけの数存在するということは奈良時代に大量生産技術があった事を意味する。次いで平安時代の日本刀や戦国時代の火縄銃等がこれに相当する。これらを産業革命とするなら産業革命と共に生まれる環境破壊もあったはずである。技術革新に積極的な戦国時代が最も環境破壊が進んだ時代で、逆に次の江戸時代は荒廃した国土の保全に勤める。

ところで産業革命の機械化の問題は単なる分業ではなく、例えば部品の精度における問題である。第２次世界大戦当時の日本はこの問題を理解していなかった。エンジン等の部品を人が丹念にヤスリで削り出すという工程は、精密機械で作成された部品に比べると精度が劣っており、そのため日本の武器は分解修理が行なえず稼働率が低くなった。今日においても日本の機械製品は、他社の部品や消耗品を排除して、互換性に乏しく脆弱で繊細である。情報社会の部品や消耗品はそれ自身が情報ツールであり、企業を超えた互換性を有する中央集権的なそれか、完全非互換という分権的部品かのいずれかになる。

⑵ 文学と著作権

産業革命の結果、大衆に享受される散文学が生まれる。この散文学は情報の発信ツールとなる。英国の場合、産業革命が進行するとともに近代的な散文学が登場する。しかし近代文学登場以前に正書法の獲得が必要である。欧米の場合、言文一致は自民族語による記述である。ルネッサンス期にそれらの先駆が生まれる。中世においてローマ帝国の共通語であったラテン語から宗教革命を経て、自国民語訳の聖書を手にし、同時にグーテンベルグの印刷機械で出版が成された。自国語の正書法とは言文一致、つまり口語に近い文章表現であり、散文はこれらによって表現可能となり、一般に普及する。

日本では明治期に言文一致の獲得という一般的認識があるが、欧米の事情と比較すると日本語の場合、正書法を獲得したのは奈良時代の『古事記』や『万葉集』で、この時点で近代文学の獲得と考えるべきである。つまり明治期の近代文学の誕生は国際化と、長い自国の文学の歴

史がリンクした二度目の言文一致であり、日本の特殊事情といえる。また近代文学は内容的に『源氏物語』や江戸時代の現代文学的内容から比較すると数段後退しており、これは江戸時代の地方分権的国家を明治政府の中央集権的国家に差し替えたのに似て、文化的後退である。

また著作権という制度はブランドを保護する。著作権の保護されない国ではブランドは育たない。常に海賊版が登場し、正当で文化的な経済活動を破壊する。例えば韓国の場合、ハングルを中世には手に入れているが、一般化するのは日本による植民地時代で、文学が登場するのは戦後になる。ソウルオリンピック前後に著作権法を整備した、当初サムソンはCDやLD等の巨額の特許料の支払に苦しむが、今日、ブランドとして利益を上げている。

情報は表現手段と表現内容が整って初めて機能する。現在のソーシャルネットワーク等の情報は、動画や映像が主体で簡潔性や正確さを欠く。また多くの国で携帯電話のメール機能がほとんど使われていない。これは文章表現手段を獲得していないためである。最初に自国語による言文一致の正書法を獲得していないと、極めて限定的な情報革命しか招来できない。

⑶　経済、江戸幕府と明治政府の違い

江戸幕府は中央集権的でなく、外交や軍事において充分な政策を取らなかった為に崩壊した。その結果に鑑み、国際化に対応すべく明治政府は急速な中央集権化と外交軍事に力を注いだ。そして軍事力の集約とともに早速、領土拡大を開始する。しかしこの政策は敗戦で行き詰る。徳川幕府が分権国家を築いたように戦後、政府は外交と軍事を米国に任せ、内政のみに集中する。そして外交と軍事を放棄して中央集権体制を維持すること、中央政府をそのままに残すことは無意味であるが、政府を解体せず、公共事業を開始する。当初国民全般が利益を得たが、やがて大規模干拓、原子力発電所のように一部の人々しか恩恵を受けない公共事業が増える。これら地域に密着した事業は本来的には中央政府ではなく地方政府に任せるべきであった。

日本の経済的失速を内需の拡大によって克服しようとする考え方があるが、ある意味でこれはどんな仕事でもよい、給与さえ貰えれば国民は消費し、経済が活発化するという考えに過ぎない。富の拡大や再生産、再分配が続く間は日本は経済大国であり続けるが、やがて富や資源は枯渇する。つまりどんな仕事でもとは、どんな土木事業であってもと同義である。公共事業で富の分配を行なう方法は決して情報社会における有効な経済活動ではないだろう。

江戸時代の経済は、地方分権と海外貿易を行なわない閉鎖経済の、一つの優れたモデルといえる。しかし今日の経済は輸出入なしには成り立たない。産業社会以後の高度にグローバル化した情報社会の富の分配は簡単ではないが、それが出来ないと国は崩壊する。富の分配は社会システムであり、戦争も軍事的な戦争ではなく経済的な戦争である。そして、より高度な情報戦へ変貌を遂げている。経済的に他国を支配することで、経済的中央集権国家の樹立を試みる。そして今、世界中で石油エネルギーに代るエネルギー転換を迫られ、エネルギー確保と情報のコントロールが不安定化し、いっそう巨大な国家の安定は困難である。

⑷　地球温暖化と原発

産業革命の末期に地球温暖化という環境リスクが登場する。これが真のリスクどうかは不確かな部分も多い。しかし、このリスクを回避するために原発が推進され、原発事故が起こった。そして現在、再生可能エネルギーへの移行が叫ばれてる。再生可能エネルギーの実態は風力と太陽光発電である。特に太陽光は手軽に手に入れられると人々は認識させられている。しかし太陽光パネルはシリコン半導体であり、生産には大量の電気が必要である。シリコン表面を洗浄するためにフロンあるいは代替フロンを使用しなければならないという問題は置き去りである。また磁石や電池も不可欠であるが、生産にはレアアースつまり放射性物質が使われる。原発の放射能を避けるためにレアアースの放射能を受け入れるのは大きな矛盾でしかない。

環境破壊と公害問題は企業の存続を脅かす。炭鉱は戦前には北海道や九州に多数存在していたが、現在はほとんど放置されている。石炭は硫黄化合物や放射性同位元素を含むが、1970年代に環境技術が進歩して硫黄化合物の除去が自国の技術で可能になった。いまや石炭は比較的リスクが少ないエネルギーである。当然今こそ、太陽光発電と石炭コウジェネレーション発電とのリスク検討がなされるべきだろう。コウジェネレーション発電（以下コウジェネ）という技術は、発電に直接使わず捨てられる熱を回収する技術で、現行の電力会社の蒸気タービンを使った大規模発電所では熱の約７割を捨てている。コウジェネはこの熱を回収して冷暖房等に利用し、エネルギー効率を飛躍的に高める技術であるが、冷暖房を利用する消費者が発電所の近くにいなければならないという制約がある。つまりエネルギーの地産地消である。電力会社の発電所は原子力を始め消費地から遠い。コウジェネは、それほど新しい技術ではないが原子力が一番安い発電であるという既成事実を演出するために、著しく割を食った技術である。

ⒸⒸ　情報革命

時代の転換期にある今、国家あるいは人の在り方として中央集権的か地方分権的かという選択が必要である。分権を推し進めると中央は必然的に空洞化する。日本の産業が空洞化したのは、世界規模での生産拠点の開発途上国へ移転と技術の流失が主な原因である。中央集権化していた技術が途上国という地方に分散し、製品もそこで大量に消費され、経済も権力図も逆転現象をおこした。経済的な戦争において戦勝国が次なる中央集権的経済網を敷くのである。そこで中央集権に対抗する防御策が必要になる。それがスタンドアローンという方法である。

⑴　発電とスタンドアローン

現在、早急に実現可能で最も環境に優しい発電は、炭酸ガスを発生しない天然ガスを燃料としたガスタービンのコウジェネで、これを推進すると日本が輸入するエネルギーは現行の半分以下で良い事になる。エネルギーの節約が全ての原動力となり、ここに大きな変革を呼び込む。

天然ガスを売ることは考えず、自家用にだけ使うのであれば、浅い井戸から比較的容易に取

り出せる。ガスタービンによる自家発電は、出力のコントロールが蒸気タービンを使った電力会社の発電所よりも容易であるために、夜中の電気が安いという事は起こらない。必要な分だけを発電することが可能で、余った電気を電力会社に売電する必要がなくなる。また大規模商業施設や工場にコージェネシステムを組み込むと、これらの施設の発電はネットワークや送電システムから離脱し、地方分権的スタンドアローンで運用することが可能となる。

そして電力会社は発送電を分離することなく、巨大な発電所は意味を失って休止し、送電システムだけの会社になる。当然、原子力発電は廃止となるが、放射性物質が消えたわけではなく冷やし続けるために、今度は電力を買電、消費しなければならない。つまり電力会社は電気が売れないばかりか送電線網を利用し売電する顧客もなくなり、中央集権的送電線網を維持することが出来なくなり、最終的に原子力関連施設の管理会社となるしかない。

ちょうど大型の汎用コンピュータがパーソナルコンピュータに取って代わった事象に似ている。スタンドアローンで孤立するポリス的小国家をクロポトキンは『パンの略奪』の中で描いた。小さな地方分権的自治体のスタンドアローンな関係を理想とするという考えで、中央集権化に対抗する戦略である。アナーキストも科学万能主義的ではあるが、今日において人は科学万能主義に次第に懐疑的になっている。

ところで３・11は一瞬にして原子力神話を打ち砕いた。原子力発電所の解体は沸騰水型を使っている原子炉から行なうべきである。沸騰水型はタービン建屋が汚染されており、解体には時間がかかる。汚染の少ない加圧水型は原子炉建屋以外は容易に解体出来る。日本でこの種の原子炉を持つ電力会社は北海道、関西、四国、九州の４つだけで、他は沸騰水型で危険である。また、どの原発も海に面しており、津波が来れば放射性物質の流失は避けられない。

放射性物質の処分は結局１万年以上保管できる不変の容器が必要だが、いずれの国も企業もその技術はない。現在のところ、地下核実験場のような施設が暫定的最終処分場になる。垂直に1000m以上の深さを持ったトンネルに埋設する施設への封印が当面のリスク回避として現実的である。もう一つの方法としてカナディアン炉を導入し、プルトニウムを全て燃やしてしまう方法が考えられる。あるいはカナディアン炉を持っている国にプルトニウムを売却する。いずれにしても現在の先進国で原子力施設が大きな経済的負担、不良債権化する事は必然である。

原子力の平和利用は難しい。多くの国がこの平和利用を唱えたが、現実に成功したのは英国、米国とカナダだけである。他の国はコピーやライセンスあるいは核爆弾開発後、事実上平和利用を放棄する。そしてDDTと同じことは原発でも起こり得る。途上国での原発受容である。故に原発の主要生産国である日本政府と日本企業は安全な原発を開発しなければならない。特に最も安価な沸騰水型原発のタービン建屋の汚染を食い止め、点検で被曝しにくい、事故の少ないプラントの開発、輸出に勤めるべきである。

⑵　福祉と雇用と富の分配

失業率の低減は必要であるが、どんな仕事でもよいでは駄目である理由は、公共事業がどんな公共事業でもよいであるのと同様、借金によって国家財政は破綻する。そこで有効策として浮上して来るのが労働のシェアという方法である。基本的な労働時間を短くすることで賃金は下がるが雇用を生み出し富の平等な分配が可能となる。そして人々が賃金を安心して消費することによって再分配が行なわれる。雇用も平等でなければ人々は税を支払えないし、支払わない。雇用の最低ラインは正社員である。全ての住民に金券を配るという政策はその場凌ぎで、労働を伴わないために消費を促さない。

情報社会では仕事は単一の仕事を終身雇用で行なうのではなく、個人の能力や興味によって収入は少なくても、複数の仕事を同時並行で行なえる。いわゆる二足のわらじである。単一という農業社会的考えを捨てるべきで、学校のクラブ活動等を雛型とする社会では、スポーツにおいても複数のスポーツをすることを裏切り行為のように日本的指導者は主張する。しかし違った種類のスポーツをすることでより自分に向いたスポーツを探すことが可能になり、筋肉の硬直も少なく怪我もない。経済においても単一あるいはプロパーは景気を改善しない。複数の仕事は一個人の中で異業種のコラボレーションが行なえる。またコンプライアンスという点においても複数の組織に関わることは重要である。

そこでフルタイムとパートタイムという枠で考えると１つはフルタイムで全収入の51％を得る。残りの49％の収入は複数のパートタイムで得る。所得税は51％に課税し49％は無税にする。人々は51％を貯蓄に回し49％を消費に回す。そして最終的に51％で不動産や耐久消費財の購入を行なう。このようにして経済は活性化する。つまり正業と副業と区別し、副業には永久的に課税しない。期間を限ると消費に回らず貯蓄に回る。

また中央集権国家の公共事業の一種に福祉がある。健康保険と年金がそれである。国家的な健康保険制度を米国のオバマ大統領が設立しようとしているが米国は地方分権的国家であるのでこれは難しい。地方分権的な江戸時代、講という掛け金を支払う互助金融があった。それ故に日本の健康保険制度は掛け金を支払わなければならないが、掛け金を支払えない経済的困窮者はサービスを受けれないという矛盾が生まれる。本来、税の再分配であったはずであるから掛け金の徴収は税の二重徴収である。年金の場合も同様で、こちらは軍隊の恩給制度を手本にしたために階級による年金額の差を引き継いだ。これも掛け金を満期まで支払えない生活困窮者は年金を貰えないばかりか、それまで払ったものも、取られた儘で還元されず、年金受給者も所属した組織により金額が異なり不平等感を助長する。健康保険の場合も同様であるが、それによって利益を得る人々が医療関係者に傾きすぎると不平等感が助長される。

NHK（公共放送）も視聴料を徴収するが人々が視聴料を支払わない理由は、この税の二重徴収に当たるからである。少数の人だけが放送の視聴端末を持った時代、視聴料の徴収は二重徴収にならなかったが、現在は大部分の人が複数の端末を持つ。故に税によって賄うべきであ

る。

ところで情報化社会の利点は、住む場所に関係なく好きな仕事を選べる点にある。例えば都会では困難であったユティリティの大きな住居、時間の有効活用、あるいは田舎暮らしで完全な自給自足を求めることも可能となる。雇用や福祉はこれらを含んだ生き方の多様性の問題である。

⑶　著作権というデータ・ベース（DB）情報

産業革命で得た最も重要な因子は著作権である。著作権は土地の私有に似ている。結局のところ共産主義国が崩壊した一因は、著作権を認めなかったために崩壊したと考えるべきである。ヨーロッパでは楽譜の出版が比較的早かった。これにより作曲家は著作権料で生活できた。これらの著作権はやがて商業的ブランドを生む。中国やロシアからブランドが生まれないのは著作権をないがしろにしているからであり、おそらくこれも情報革命の重要な条件である。

情報革命が何であるかトフラーが執筆した当時不明であったが、次第に明らかになりつつある。機械そのものにも部品等に情報は含まれ、DB 化する。情報の定義は人々が DB に繋がった状態をいう。ソーシャルネットワークは一種の DB である。問題は今日の DB も PC も本来的に理科系（自然科学）のための道具であって、文科系（人文科学）の道具でないことである。理科系の道具は常にアクセスしている状態が続くことであり、文科系的接続とは常には繋がらないということである。例えば常に繋がる自然科学的接続はサイバー攻撃に弱く、文科系のそれは回路が切れてもそれ程の影響は受けない。つまり回路の断絶は理系では大爆発のような大事故に繋がり人が死ぬ。文系は不便であっても殺人事件は起こらない。

また課題の１つは、DB の統合である。図書館の目録がデジタル化した時、例えば国会図書館には複数の手書の目録が存在し、それらをデジタル化によって統合することは、インターネットによる利用者の利便性に貢献した。大阪府立図書館も目次まで記録した複数のカード目録が存在していたが、統合によりそれら詳細なデータは当初削除された。複数の目録の統合は多くの場合、そのフォーマットに問題がある。デジタル化自身には異なったフォーマットを受け入れる能力があるが、入力する人間はより簡略化した、情報が少ないフォーマットを選択する。パソコンソフトにはその能力があっても、人はより楽な入力を選択するのであり、その事を予め、初期設定の中に入れておく必要がある。

⑷　ネットワークへの接続（リンク）、あるいはスタンドアローンという選択

電話や無線、インターネットによって DB へ繋がる。①直列接続（階層的接続）は中央集権的であり、②並列的接続は地方分権的である。また③孤立主義というリスク回避。

①階層的接続（長い接続）とは従来型日本の一般的組織形態。例えば最下層のメンバーが新しい有望な情報を見つけたと仮定する。これを DB に入れるべきだと判断し、上司に報告する。

その上司は更に上の上司に報告し、数段階の階層を経て、最後に命令が出る。次々に部下を経て、最終的にDBの入力専門係に到達し、入力がなされるが、それまでに相当の時間が経過しており、時期を逸している。DBに入力すると一般のメンバーは閲覧するが、DBはあくまでも補佐的データでしかなく、命令系統は別に存在する。命令系統もまた同じように数次の階層を経て、末端に到達する。故に時宜を逸する。今日の日本は経済も官僚機構も含め、この状態にある。更に事態の進行を遅くしているのは上層部の判断停止状態が長いことである。末端から上層部に有効な情報が即座にもたらされない上に決断が出来ない状態が継続する。外部者にとってはリーダーとしての資質を欠くように見える。決断は誤った決断でも即座になされ、修正も即時に成されれば、どのような事態でも切り抜けることが可能である。つまりセキュリティーは厳しくなるが、直接接続の場合データ内に命令系を繰り込む必要がある。

②並列的接続（短い接続）は階層をほとんど設けない、『涼宮』的接続である。階層の一番上と一番下は１あるいは２程度の階層である。末端のメンバーが情報を入手すると、即座にDBに入力する。入力を行なうと周辺のメンバーが、そのデータが正しいか悪意がないかを点検し、場合によっては削除する。階層的接続構造では頂点のメンバー周辺に、DBの専門の管理者が毒見のようなことをする。つまり入力専門と点検専門の構成員が二重に存在する。階層的接続は野球やバレーボールの役割分担に近く、メンバーそれぞれが専門家であるが、補充が難しく、監督のサインのみで動くが、逆にサインがないと動けない。監督は絶対的な命令を出すように見えるが、監督の状況判断は瞬時ではない。現実社会では命令者が命令を下すまでには相当のタイムラグあり、遅きに失する場合が多い。並列的接続はバスケットボールやサッカーのメンバー構成に似ており、メンバー全員で攻撃も防御もこなし、専門家を設けない。監督のサインを見ている時間的余裕はなく、それぞれがスタンドアローンで絶妙のパフォーマンスを演じようとする。仮に間違えていても直ぐにその横にいるメンバーが間違えを補正、修正する。

③ネットワークに接続する端末はiphoneやipad、ウルトラブックのような高機能端末では全ての端末をネットに繋ぐことは今のままでは物理的に不可能ではないかと思われる。それゆえニンテンドウDSやPSPのような本来的に個々にスタンドアローンで使うことを意図した携帯ゲーム機をベースに、PHS電話機のような非力な端末接続が望ましい。そしてハッカーや中央集権的国家機能や多国籍企業体を排除できる閉鎖空間の構築を目指すべきである。DBは可能な限りフォーマットにデータを繰り込むことにより、ネットワークで処理するデータをより小さなデータにする。ゲームのようにDBを書き換えるのである。

５．おわりに

『涼宮』でハルヒは映画制作の際、協賛してもらえるよう地元の商店街に積極的に働きかける。

商店街がかつての賑わいを失った原因の一つに、地域色を廃し、地方分権を捨て、全国各地

に残る何々銀座のような命名が示すように中央集権的に振舞ってしまったことが挙げられる。つまりこれといった特徴もなく、駅前であっても便利な駐車場もない。かつて封建時代に地域の特産品が盛んに生産された。特産品は換金性が高く、江戸時代の天領で、最も換金性の高い物産が生産され、大金持ちを多数輩出した。次いで全国の城下町で、各藩の殖産興業政策により独自の文化が花開くが、あまりに特産品に傾きすぎると飢饉を生む。そのようにして地方分権と貨幣経済あるいは資本主義が発展した。商店街の再生には、たとえ交通が不便でも、人々がそこに行き、そこで買いたいと思わせる特徴、つまり現代文学で重視される風土性、地域性といったものへの再認識が必要である。もちろん定期的に全国の百貨店等を巡り、PR する期間限定の物産展や商店街共通の駐車場も不可欠であろう。例えば現在、有効に機能していない地方鉄道、港の多くと各商店街を結ぶため、交通機関あるいは駐車場との間に無料の送迎バスを走らせる。少なくとも１つの特産品を開発する。またそれを決して量販店に卸さず、ネット等の通販でも販売しない。そうすることにより評判を聞きつけて客がやってくる。そしてこれらの客を直ちに帰すのではなく、特産品以外の商店が洋品や食料を売り、飲食店で食事を与え、パチンコ屋やゲームセンターで娯楽を与えて半日以上商店街に留めるように努力する。休日に大型の車で量販店を訪れる客の大半は、どこにでも売っている商品を安く買おうとする。そうした量販店との安売り競争は無意味で、安売りは利益を生まず、資本力で必ず敗北する。量販店はシェアーという別基準で動いている。これは強国に対する、小国の軍事力あるいは経済力戦争に似ている。戦争や公共事業に対抗し得る政策は、地方や田舎における不動産の無償提供と無税が、大きな投資（借金）を伴わず最も有効である。

これらの対策は何か一つの方法ではなく、複数の方法を試みる必要がある。全てが即効率的に解決する方法はありえない。情報時代といえども平等は重要な因子である。農業革命や産業革命後に軍事強国が中央集権的世界国家を建設したが、情報革命後にも同じ事が起こるであろう。日本の律令制は明治維新まで存続し現代に至る。それは重要なのは制度ではなく、実際にはその運用の問題であることを示唆する。『涼宮』で描かれる SOS 団の存在は、律令制に対する守護地頭的運用である。より強い個、思念を持つものが世界を動かす。ハルヒの行動は強引で突飛押しのないもののように見えて理性的で、明確な意志がある。そして既成の組織を壊さず、新たな組織を創り出し共存する。物語時間の直前、時代は阪神淡路大震災で有線から携帯電話へと急速に移行し、不要になった有線はインターネットに再利用される。SOS 団は携帯とネットを利用している。

近年、環境分野にエコという新たな神が唯一絶対的存在に成りつつあったが、原発事故で大きく揺らいだ。エコそのものというよりも、それらの情報には幻想、虚偽、悪意、危険といったものが付随していたのだということが暴露された。『涼宮』でも『驚愕』で新しい神を立てようと異世界人や別の情報思念体が画策するのに似ている。

現実世界は小説以上の速度で推移している。一見、消極的に映る本を読むという行為は孤立

主義的状況を作り、情報の渦の中で積極的に情報を読み解く行為である。自分自身で入手した数多くの情報を自分の頭で統合する能力、より奥深くにある情報を引き出す能力、より強い個を築き、自分を信じて困難をタフに乗り切り、歴史を新たに創る確実なスキルとして機能する。

註

1　『涼宮ハルヒの憂鬱』（角川文庫、2003・６）。『溜息』（2003・10）。『退屈』（2004・１）。『消失』（2004・８）。『暴走』（2004・10）。『動揺』（2005・４）。『陰謀』（2005・９）。『憤慨』（2006・５）。『分裂』（2007・４）。『驚愕・前後』（2011・５）。他にテレビアニメ版、劇場版アニメ版がある。

2　新潮社、2000年。拙著「『神の子どもたちはみな踊る』についての一考察」「親和国文」2003・12。「立論のためのリスト」（「村上春樹」国文学解釈と鑑賞、2008・１）。

3　1974年、養護施設で子供が二人行方不明になり、死体で見つかり、冤罪事件に発展。

4　1984年、江崎グリコ社長誘拐事件から食品関連企業の脅迫事件に発展。かい人21面相事件ともいう。アイコンを駆使し、ネット上で巧みに画策する犯人を描いた、士郎正宗のテレビアニメ『攻殻機動隊 stand alone complex』の製薬会社脅迫事件、笑い男事件はこの引用。

5　『螢・納屋を焼く・その他の短編』新潮社（1984・１）。阪神淡路大震災後の自作の朗読会で発表したことにより、２つのバージョンがある。

6　中村光の漫画『荒川アンダーザブリッジ』（2004）に石灰で白線を引く人物が登場する。

7　自身視覚障害者でこの分野の教育者、点字新聞編集者として大きな功績があった。

8　映画『ゴジラ』1954・11・３公開。

9　拙著「現代文学としての金子みすゞ」（『女性だけで読んだ金子みすゞ』勉誠出版、2013）。

10　新潮社（2009・５、2010・４）。

11　新潮社（1977）。1954年９月初日から翌年６月６日までの物語。